

6 月総評

西躰 かずよし

職安に赤ん坊だけ抱いていく

桜庭 紀子 和歌山県

「赤ん坊だけ」という一節から、せっぱつまった覚悟が感じられる。懸命に子どもを守りながら生きていこうとする人に対して、この社会はどのように相對してきたのか。この世界の冷笑と孤独を溶かすには、どれほどのやさしさと犠牲が必要になるのか。

ひだりききのわたし  
が  
塔に立っていて  
かがみのらせんかいだん割れる

さいう 石川県

塔に立つことが、予定されていたことのように描かれる。「かがみのらせんかいだん割れる」という一節がなつかしく、いたいたしい。

檸檬水風が止んだら帰ります

azusa 京都府

「風が止んだら」とあるけれども、語り手にとって、それはどちらでもいいことで、日々を明日につなぐには、帰るところがあるというそのことだけで十分なのだろう。

点滴が海に溢れて  
一人乗り用の観覧車で眠ってる

常田 瑛子      山口県

点滴というちいさなものが、おおきな海へと包摂され、多くの人が乗れるはずの観覧車が、一人乗り用になる。その巧みな描写から伝わってくるもの。それは、誰もが、何かに抱かれるようにして眠りたいと思うことなのかもしれない。

捨てられたごはんの放物線に虹  
後頭部だけが冷たさを保つ

福地 餅子      東京都

捨てられたごはんに虹。そこにおおきな発見があったのだと思う。もしごはんが捨てられてなかったら虹も存在しなかったくらいの。後頭部のつめたさの理由は、そんなところにあるのかもしれない。

ぼんにゆいと言えば夏木になる獣

大西 美優      広島県

ぼんにゆい（おやすみ）は、たぶん眠りという仮の死へと近づくための合図で。それではじめて、獣は植物になることができる。ただ、かなしくも美しい獣のことを思う。

いた場所をわすれて海にもどる人

雲理そら      大阪府

いた場所をわすれてしまうことは、悲劇的なことだけれど、そうならないのは「海にもどる」という一節があるからだろう。仮の場所から、もとのところに戻るということ。生もまた死のとなり合わせということ。

菱の花換金所にさす蛍光灯

波津 ゆみ 神奈川県

蛍光灯のひかりによって、ようやく輪郭をとりもどす。うすぐらい換金所には、水にかぶ白い菱の花が似合う。

空の色をうつして水の冷えわたる  
海がひとつの眼であることを

早瀬はづき 大阪府

もし海がひとつの眼になれば、そこからのがれるすべはないのかもしれない。たとえば、そこにのこるのは、ひとつの手紙といくつかの文字。さいごまで、空の色をうつす海が思うのは、いつもの空の永遠のことだろうか。

鳥のみる夢にかならず降っている  
光の雨の名前を知らず

石村 まい 兵庫県

その鳥は自身の投影なのだろう。かならず降る光の雨は、めぐみの雨のようにも、終わらない夢のあかしのようにも見える。幸や不幸には、おそらく名まえなどついていなくて。雨の名まえを知らないのは、きっとほんとうで。だから、ときにそれをおそれるのかもしれない。

閉店の日の白菊を買ってゆく

上原一樹 群馬県

閉店の日の白菊という時点で、もう物語ははじまっている。その日にあえてその花を買う。そこに語り手の思いが投影される。

雨がまだ継続中のときにする  
会話があったからいまは雨

高遠みかみ 大阪府

説明口調なんだけれども、何ひとつ説明しない。それが信条とでも言いたげなくらいの面持ちなんだけれども、そんなふうにしか表現できないこともある。そんな感じの乾き。それぐらい何のことはない雨。